

長西の「諸行本願義」再検討

佐 竹 真 城

覚明房長西（1184—1266）は、その教学が一般に「諸行本願義」と評され、法然（1133—1212）の門流においては邪義・異端の人師として知られている。その「諸行本願義」は種々の定義を有しており、辞典等によれば長西教学を指す場合、

- ①念仏以外の行も仏が誓われた往生行である
- ②念仏と諸行は共に往生の正因であり優劣はない
- ③本願の真意は諸行往生にある

という三通りに定義され、資料間で見解を異にしている。また、諸先哲の研究においても長西教学を解説するなかで厳しい言葉が並べられているが、体系的に論じた諸研究は、今日では長西撰述が疑問視される書や、長西撰述と決し難い曖昧な書を多分に用いて論を展開し、あるいは長西門弟や諸師の著作に散見される説をもって長西義として扱うことも少なくない。これは、長西撰述が确实視できる著作が長らく散逸していたことによるもので、当時としては大変な成果であることは誰しも認めるところである。しかし、古写本の調査により長西撰述書が複数顕出されている今日においては、従来の研究で用いられた史料はあくまでも二次史料に位置づけられるべきものであり、そこから導き出された理解を純粋な長西教学と評価して良いのか疑わしいところもある。

これらの問題を契機として、長西撰述が确实視される金沢文庫所蔵の「浄土疑芥」からその教学を読み解いていくと、従来いわれる長西の「諸行本願義」理解に対して疑問が生じてきた。この度の考察では、長西の「諸行本願

義」について、「浄土疑芥」を通して前述の三定義の妥当性を検証する形で再検討を行った。結果、三定義のうち②・③の二つは否定されることを指摘し、併せて長西教学を再検討することの必要性を提起した。

なお、本発表の具体的な内容は、2016年度刊行予定の『宗学院論集』第88号所収の拙稿「長西の「諸行本願義」考―「浄土疑芥」を通しての再検討―」に纏めている。ご高覧いただければ幸いである。